

新刊のご案内

本書『視覚の共振』の著者・勝井三雄氏は、戦後のデザイン史のなかで大きな業績を残し、今なお現役として、新たな視覚世界への挑戦を続けるデザイナーです。

主な専門領域はポスターなど二次元のグラフィックですが、エディトリアル、CI、サイン、ディスプレイ、空間構成ほか、幅広くアートディレ

クションに携わり、多様な表現を追求してきました。企業の広報を担うデザイナーを皮切りに、フリーランスとして制作に取り組むようになってからは、時代を牽引するデザインの動向と密接に関わり、多様な領域のクリエイターと協働しました。

早くからコンピュータ・グラフィックスと先進的な印刷技術の開拓に

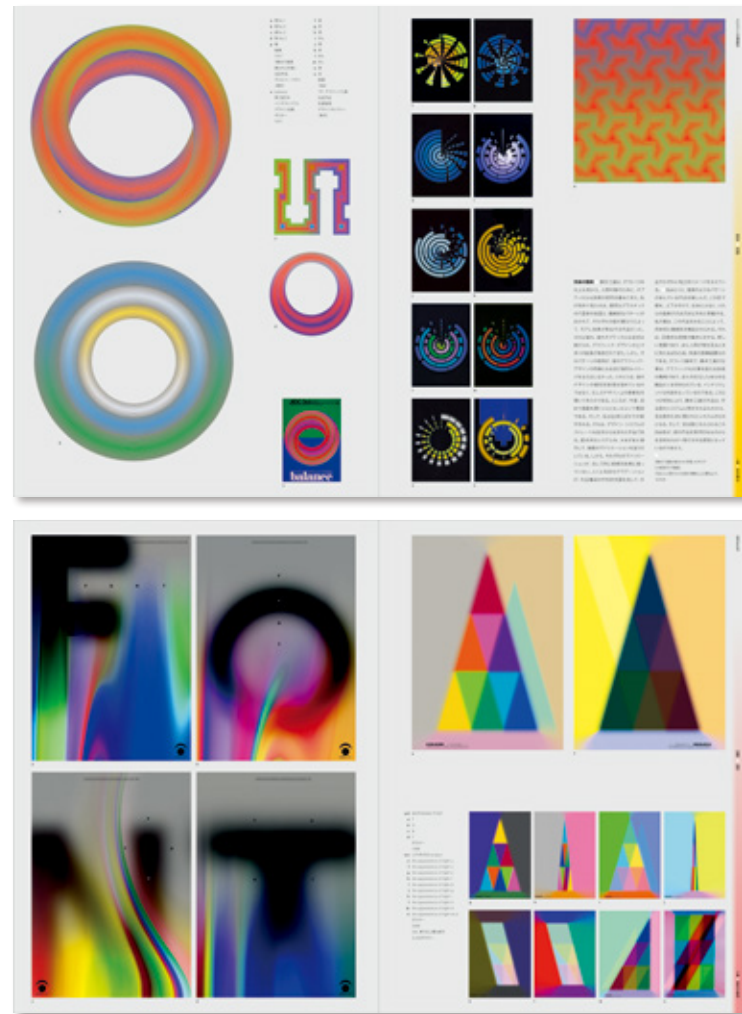
関心をもち、そのかたわら、「色と視覚」に関するデザイン理論を実践的に構築しつつ、美術大学で次世代の指導にも力を尽くしました。

本書は勝井三雄氏の60年余の活動を、「時代」「デザイン」「人物」などの観点からも把握できる構成をとっており、見ただけで美しさを感じ取れる作品集となっています。



『視覚の共振』

勝井三雄著 光村図書出版 2019年
本体3,000円＋税



上／版画作品と、それをういたポスター
下／フォント制作会社のポスター

美術準備室 No.15

2019(令和元)年6月28日

発行人 ■ 小泉 茂
発行所 ■ 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話：03-3493-2111 www.mitsumura-tosho.co.jp
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp
デザイン ■ Better Days (大久保裕文+深山貴世)
印刷所 ■ 株式会社 加藤文明社



光村図書



アトリエ訪問
画家

津上みゆき

作家の肖像
洋画家
野見山暁治

放課後ART
●長野県
軽井沢高等学校
●アークスプロジェクト

この1点
「弥勒菩薩
半跏思惟像」
はな

特集
「私の心の風景」を
描こう
東京都
府中市立府中第六中学校

本誌は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、(一社)教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」のによって配布しております。

ア ト リ エ
訪 問

第 15 回

津上みゆき

画家

キャンヴァスからあふれる光と色彩。
画家・津上みゆきが描く抽象画のようにも見える風景画は、
目にした者の記憶の中にある風景をよびさます。
彼女はどんな光の中で、何を見つめながら、
その作品を生み出しているのだろうか。

文章 長谷川 華 撮影 永野雅子

「人が描かれていなくても、 人のおいが感じられる。 それが風景画。」

大通りを少し入った鎌倉の住宅街。歌人の住まいだったという古い平屋を自分たちでリフォームしたのが、画家・津上みゆきの住居兼アトリエだ。この場所を選んだ理由を、「窓からたっぷり自然光が入り、海にも山にも近くて季節の流れを日々感じられるから」と語る。

——1日の大体のスケジュールを教えてください。

津上 夫が勤め人なので、彼が出かけるとともに、私もアトリエに移動します。日が出ているときにだけ制作をし、日が暮れて風景が見えなくなったらやめます。描いているモチーフと、自分の置かれている環境を同じにしておきたいからです。

そのためにも、自然光がよく入るアトリエを探していて。ここは、何



アトリエの一角には顔料の瓶が並び、棚は、瓶の高さに合わせた手づくり。

年も使っていなかった建物を一つ一つ修理したものです。プロの手も借りましたが、壁や床は自分たちで塗りました。棚は夫の手づくりです。

アトリエにいるとき以外は、散歩がてら、スケッチをしに行くこともあります。すぐ近くには小川が流れていて、春になると桜が咲くんです。その桜をここに引っ越してきた9年前からずっと描いていて、その作品を2018年に発表しました。

——津上さんが画家になったきっかけとは、何だったのでしょうか。

津上 小さいときは暗い性格で、友達もあまりいなくて、一人で遊んでいるような子でした。母親と仲がよくて、よく一緒に花を見に出かけていました。

中学校は、中高一貫の女子校に進み、そこで美術部に入りました。高校生と一緒に講評会をするのがとてもおもしろかったんです。画家を目指す大きなきっかけとなったのは、3年生のときの夏合宿です。漁村で廃屋みたいな船屋を見つけたのですが、夏の海と空にその船屋というコントラストが印象的で、絵に描いたんです。すると、それが講評会ですごく褒められて、小学生のときの暗黒の時代から一気に自分の世界が広がったのを今でも強く覚えています。

自分が内面から出したものと、外からの評価が合わさったというか、中学生なりに、「絵がないと自分は生きていけないんだ」ということを自覚しました。その後は、日常生活

でもいろいろ苦手なものを克服して、今がいちばん元気です。

——それからずっと風景を描き続けているのですか。

津上 そんなことはなく、京都の美大ではいろいろなことを学びました。卒業後の研修生時代に、「哲学の道」を自転車で走っていたら、突然、自分が絵を好きになった原点が「風景」だったことを思い出したんです。「今、自分が風景を描いたらどんなものになるんだろう」と思って、再び風景画を描くようになりました。

昔は、スケッチしたものをただ拡



大するという描き方をしていました。このとき以来、どういうふうにも風景を取り込んでキャンヴァスに落とすのか、それを模索するようになり、今に至ります。

——津上さんにとって、風景画とは



ドイツ滞在時、和紙に描いたスケッチ。「ドイツの風景は、水彩と和紙の質感に合う」。

何でしょうか。

津上 風景画って、人がその景色を「風景」とよばなければ風景画にはならない。だから、人があまり描かれていなかったとしても、人のおいが感じられるのが、風景画なのではと考えています。

ただ、説明的に描くと自分のフィルターが見えてしまうようで嫌なんです。誰もがもつ共通のイメージみたいなもの、具体的に写真には撮れないけれど記憶に残っているようなものを、自分なりの表現方法で描けるといいなと思っています。



散歩のときには、スケッチができるように、水彩絵の具入りのパレットを持ち歩く。

つがみ・みゆき

1973年東京都生まれ。1998年、京都造形芸術大学大学院修了。2003年、VOCA賞受賞。2015年文化庁助成により、ドイツにて滞在制作・個展を開催。「View」と名付けた風景画を描き続ける。作品集に『津上みゆき 時の景 ——つなぐとき つもるとき』（求龍堂）。2019年7月13日～9月8日の会期で、神奈川県立近代美術館 葉山にてグループ展「みえるもののむこう」開催予定。